

指定 名称

所蔵先

期間

# 国宝 源氏物語絵巻 平安時代 12世紀

	源氏物語絵巻 若紫 絵 断簡	一幅	東京国立博物館蔵	
	源氏物語絵巻 若紫 詞 断簡	一葉	個人蔵	
	源氏物語絵巻 末摘花 詞 断簡	一葉	書芸文化院蔵	11/14-22
国宝	源氏物語絵巻 蓬生	詞二面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 関屋	詞一面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 絵合	詞一面	徳川美術館蔵	
	源氏物語絵巻 松風 詞 断簡	一幅	書芸文化院蔵	11/23-12/6
	源氏物語絵巻 少女 詞 断簡	一葉	個人蔵	
	源氏物語絵巻 常夏 詞 断簡	一葉	書芸文化院蔵	11/14-22
	源氏物語絵巻 柏木一 詞 断簡	一葉	書芸文化院蔵	11/14-22
国宝	源氏物語絵巻 柏木一	詞二面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 柏木二	詞四面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 柏木三	詞一面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 横笛	詞一面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 鈴虫一	詞二面・絵一面	五島美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 鈴虫二	詞二面・絵一面	五島美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 夕霧	詞二面・絵一面	五島美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 御法	詞三面・絵一面	五島美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 竹河一	詞二面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 竹河二	詞四面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 橋姫	詞二面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 早蕨	詞一面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 宿木一	詞一面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 宿木二	詞一面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 宿木三	詞一面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 東屋一	詞二面・絵一面	徳川美術館蔵	
国宝	源氏物語絵巻 東屋二	詞二面・絵一面	徳川美術館蔵	

名称	員数	時代・世紀	所蔵先
----	----	-------	-----

## よみがえる源氏物語絵巻—平成復元模写—

蓬生	絵	加藤純子筆	一面	平成17年<2005>	徳川美術館蔵
関屋	絵	加藤純子筆	一面	平成17年<2005>	徳川美術館蔵
柏木一	絵	宮崎いづ美筆	一面	平成17年<2005>	徳川美術館蔵
柏木二	絵	加藤純子筆	一面	平成16年<2004>	徳川美術館蔵
柏木三	絵	林功筆	一面	平成11年<1999>	徳川美術館蔵
横笛	絵	富澤千砂子筆	一面	平成16年<2004>	徳川美術館蔵
鈴虫一	絵	加藤純子筆	一面	平成17年<2005>	五島美術館蔵
鈴虫二	絵	加藤純子筆	一面	平成17年<2005>	五島美術館蔵
夕霧	絵	加藤純子筆	一面	平成17年<2005>	五島美術館蔵
御法	絵	加藤純子筆	一面	平成17年<2005>	五島美術館蔵
竹河一	絵	馬場弥生筆	一面	平成15年<2003>	徳川美術館蔵
竹河二	絵	富澤千砂子筆	一面	平成17年<2005>	徳川美術館蔵
橋姫	絵	宮崎いづ美筆	一面	平成16年<2004>	徳川美術館蔵
早蕨	絵	馬場弥生筆	一面	平成16年<2004>	徳川美術館蔵
宿木一	絵	加藤純子筆	一面	平成17年<2005>	徳川美術館蔵
宿木二	絵	加藤純子筆	一面	平成16年<2004>	徳川美術館蔵
宿木三	絵	林功・馬場弥生・宮崎いづ美筆	一面	平成13年<2001>	徳川美術館蔵
東屋一	絵	馬場弥生筆	一面	平成17年<2005>	徳川美術館蔵
東屋二	絵	宮崎いづ美筆	一面	平成15年<2003>	徳川美術館蔵

## 国宝 源氏物語絵巻 模写の系譜

源氏物語絵巻 現状模写	住吉広行筆	二巻の内	江戸 18-19世紀	徳川美術館蔵
源氏物語絵巻 現状模写	田中親美筆	三巻の内	昭和10年<1935>	徳川美術館蔵
源氏物語絵巻 復元模写	桜井清香筆	十九面の内	昭和33-38年 <1958-63>	徳川美術館蔵
源氏物語絵巻 現状模写	東京藝術大学本	四十三面の内	平成17-23年 <2005-11>	徳川美術館蔵
源氏物語絵巻 木版刷	川面義雄製作	五十六面の内	昭和17-38年 <1942-1963>	徳川美術館蔵

以上

# 国 宝 源 氏 物 語 絵 巻

国宝「源氏物語絵巻」は、紫式部が著した『源氏物語』を抒情的な画面の中に描き出した、日本を代表する絵巻です。『源氏物語』の絵画化は、その成立当初間もない頃からおこなわれていたとみられているものの伝わっておらず、本絵巻は現存する作例としてはもっとも古く、12世紀前半に白河院・鳥羽院を中心とした宮廷サロンで製作されたと考えられています。

当初は『源氏物語』全帖を一具として絵画化が試みられていたとみなされていますが、現在、尾張徳川家伝来の蓬生、閑屋、柏木一〜三、横笛、竹河一・二、橋姫、早蕨、宿木一〜三、東屋一・二の9帖15段分の詞書と絵、および絵が失われ詞書のみが残る絵合の1段が名古屋・徳川美術館に、阿波・蜂須賀家に伝来した鈴虫一・二、夕霧、御法の3帖4段分の詞書と絵が東京・五島美術館に所蔵されています。これらを合わせた13帖分と、諸家に分蔵される若紫・末摘花・松風・薄雲・少女・蛍・常夏・柏木の詞書の数行の断簡、および後世の補筆が著しい若紫の絵の断簡（東京国立博物館蔵）を含めた20帖分が、900年近い星霜を経て現在に伝えられています。

絵は、墨描きの下図を描き、構図に微妙な修正を加えながら彩色を施し、さらに顔の輪郭や目鼻、あるいは衣や調度の文様を描き起こす「作り絵」で、一線のように引かれた目、「く」の字状の鼻、ぼつんと点じられた小さな口で面貌を表現する「引目鉤鼻」や、屋根を取り去って屋内の情景が覗き込めるように描く「吹抜屋台」などの描法により、『源氏物語』の世界を余すところなく伝えてくれます。詞書・絵ともに現存する19段のうち11段は、詞書中に和歌を含み、さらにこのうち六段は登場人物間にかわされた贈答歌を中心に場面が選ばれているので、物語の行間に込められた抒情性や登場人物の心の綾までもが巧みに描き出されています。

詞書は、11世紀以来の伝統を引き継ぐ美しい連綿体で書きつづられた流麗な書風や、自由奔放で肥瘦にとみ、側筆の重厚で力強い藤原忠通（1097～1164）にはじまる法性寺流の書風など、当時の新旧の書の様式が混在しています。また詞書に使用された料紙には美しい装飾が凝らされており、絵・書と一体となって王朝人たちの美意識を伝えてくれます。

見る者に、深い感動を与え、平安時代の雅びな世界へと誘ってくれる国宝「源氏物語絵巻」を、是非この機会にご鑑賞いただければと思います。